

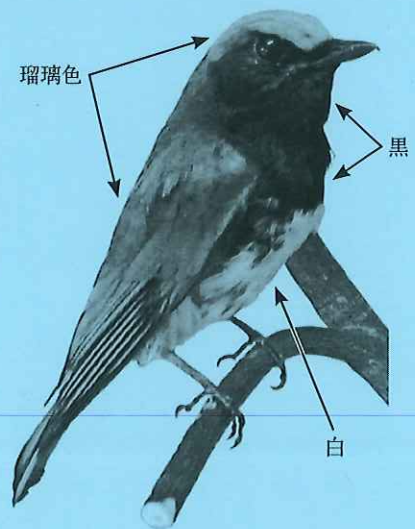
7. オオルリ (大瑠璃)

春の植物園には、出会いを求める鳥たちのさえずりが響き渡ります。色々な種類の鳥が競うようにさえずり、パートナーを探しますが、その中でも鳴き声と姿、両方の美しさを兼ね備えているのがオオルリ (*Cyanoptila cyanomelana*) です。

オオルリはスズメ目ヒタキ科の鳥で、体はスズメよりやや大きく、^{くちばし}嘴から尾までが16 cm程になります。ヒタキ科の鳥には雌雄で羽色の異なる種類が多く、オオルリもその一つです。成熟した雄は和名や学名(ギリシャ語で *cyanoptila* = 暗青色の羽、*cyanomelana* = 青黒色の意)が示す通り、頭から背中、尾にかけて光沢のある青(瑠璃色)をしています。また、^{ほお}頬から^{のど}喉、^{わき}脇にかけて黒く、お腹が白いなどの特徴から、他のヒタキ科の鳥と容易に見分ける事が出来ます。雌はお腹の白い部分以外は茶褐色で尾にやや赤みが入る地味な体色をしています。同じヒタキ科のキビタキ (*Ficedula narcissina*) の雌やコサメビタキ (*Muscicapa dauurica*) と似たような体色をしているので、雄と違って見分けるためにはじっくりと観察することが必要です。未成熟の若い雄は翼、腰、尾が青く、頭部や背中、胸が茶褐色といった、成熟した雄と雌の中間的な体色をしています。

夏鳥として日本各地の低山地や山地に渡来し、広葉樹林や針広混交林で過ごします。特に溪流沿いの林を好み、川の上など開けた場所で虫を食べています。地上に降りる事は少なく、飛んでいる虫を見つけると飛びながら捕えます。繁殖は岩の上や木の窪みにコケを皿形に積み上げて作った巣を利用します。夏を過ぎると南へ渡り、中国南部、東南アジア、マレー諸島で越冬します。

園内では春から夏にかけて湿生園周辺でよく見られます。繁殖期の雄は^{こずえ}梢にとまって「ポイヒーピピ」や「ピールリピールリ、ジェツジェツ」とゆっくりさえずるので、木道で声が聞こえた時には立ち止まってみると、色鮮やかな雄が横切るかもしれません。雌も子育て中に危険を感じると、警戒音として雄のさえずりに似た声を出しますが、これまで園内で繁殖が確認された事はありません。しかしながら毎年のように雄の姿が観察されるということは、園内にはあまりもてないオオルリが来ているのかもしれません。



オオルリ (*Cyanoptila cyanomelana*) ♂

8. コムクドリ (小椋鳥)

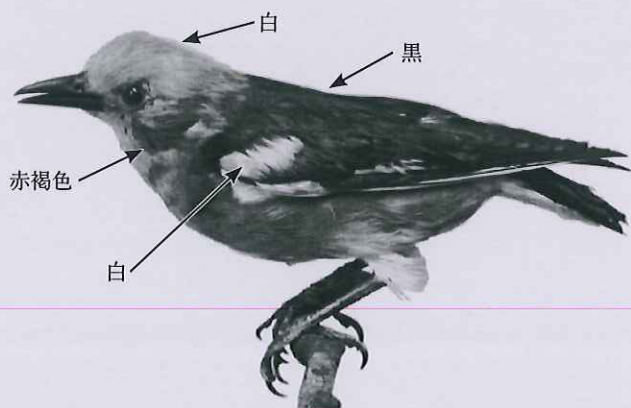
春から初夏にかけて植物園では色々な種類の鳥のさえずりを聞く事が出来ます。その中で「ピューイキュルキュルピューイ」と、一際大きく、頻繁に聞こえる声があります。毎年のように聞こえるこの声はコムクドリ (*Sturnus philippensis*) のさえずりです。コムクドリの声はとても大きく、警戒しているときに発する「ギャーギャー」という濁った声くちばしもよく聞こえます。

コムクドリはスズメ目ムクドリ科の鳥で、体はスズメよりも大きく、くちばし嘴から尾まで 19 cm 程になります。雄と雌では体色が異なり、雄は頭が白くて頬が赤褐色をしています。また、背中中は黒くしてお腹が白く、腰の薄橙色と翼の白斑が飛んでいる時によく目立ちます。雌は頭から腹まで灰白色で背中と翼が暗灰色をしています。北海道に生息するムクドリ科の鳥はコムクドリとムクドリ (*S. cineraceus*) の2種で、どちらも園内で観察する事が出来ます。ムクドリはコムクドリよりも体が大きくて (嘴から尾まで 24 cm 程) お腹が灰褐色で全体に黒っぽく見えます。また、ムクドリの嘴と足は黄色く、コムクドリはどちらも黒いので見分けが付きま

す。夏鳥として繁殖のために本州中部以北や北海道などに渡来し、主に農耕地や広葉樹林で生活しています。雑食性で主に樹上でサクランボなどの果実や昆虫などの小動物を食べていますが、園内では地面に降りて昆虫などを食べる姿がよく見られます。普段はつがいか家族単位で行動しますが、渡りの時期が近付くと群れをつくりま

す。夏を過ぎると群れで南へ渡り、フィリピン・ボルネオ・モルッカ諸島などで越冬します。

別名サクラドリとも呼ばれるように、桜の花が開くころに園内に飛来し、秋まで賑やかな声を響かせています。繁殖には主に樹洞やアカゲラの古巣を利用する他、家屋や巣箱などの人工物もよく利用します。アカゲラやムクドリと営巣する環境がよく似ているため、コムクドリが飛来した直後には巣穴を巡って両種と争う事があります。園内では毎年数組が樹木園などで繁殖していますので、散策中に騒がしい鳥の声が聞こえた時は、声のする方に注目すると、賑やかなコムクドリの家族が見られるかもしれません。



コムクドリ (*Sturnus philippensis*) ♂

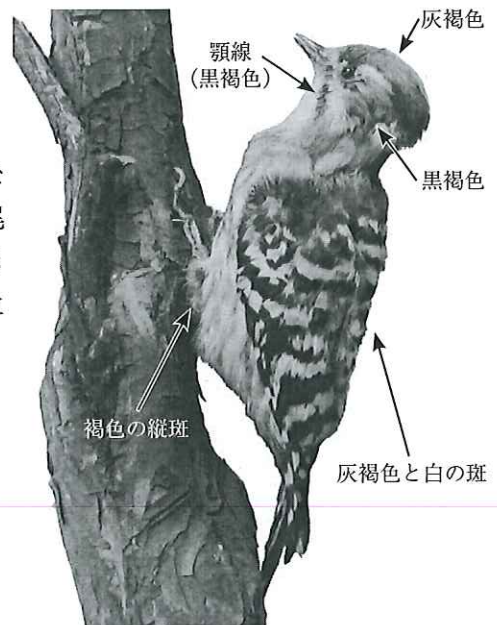
9. コゲラ (小啄木鳥)

植物園では鳥の声に交じって「コツコツ」や「コンッコンッコンッ」と木を叩く音が聞こえる事がよくあります。音のする方をよく見ていると、木の幹や太い枝で木を突きながら移動を繰り返しているコゲラ (*Dendrocopos kizuki*) が見つかるかもしれません。

コゲラはアカゲラ (*D. major*) やクマゲラ (*Dryocopus martius*) と同じキツツキの仲間、分類学的にはキツツキ目のキツツキ科に属します。日本で見られるキツツキの中で最も体が小さく、スズメと同じくらいくはしの大きさで嘴から尾までが15 cm程になります。背中は灰褐色と白のまだら模様をしていて、腹側は白く、胸から脇がくせんに褐色の縦斑があります。目の後方と顎線は黒褐色で、頭部は灰褐色をしています。野外では確認しにくいのですが、雄には後頭部の左右両側に小さな赤い羽根があります。

コゲラは日本列島や朝鮮半島、沿海州などアジア北東部に分布しています。日本では北海道から八重山諸島に分布し、地域ごとに体色などの異なる9つの亜種に分けられています。北海道で見られる亜種はエゾコゲラ (*D. k. seebohmi*) と呼ばれ、北海道の他にサハリンや南千島にも分布しています。主に広葉樹林で木の表面や樹皮の内側にいる虫などを餌にしていますが、雑食性で木の実を食べる事もあります。春から夏には単独かつがいで行動する事が多く、秋から冬にはカラ類やエナガと混群をつくる事があります。

コゲラに限らずキツツキの仲間の多くは、足の指が前2本後2本に分かれる対趾足たいしそくになっていて、木の幹などに縦にとまるのに適した形になっています。また、尾羽がとても丈夫で、尾羽と足で体を支えながら木を突きます。体は小さいですが嘴は丈夫で、太い枯れ枝などに直径3-4 cmの穴をあけ、トンネルを掘って巣穴にします。園内では1967年から繁殖が確認されるようになりました。一年を通して園内のあちこちで見られ、「ギーッ、ギーッ」や「ギーッ、キッキッキ」きという特徴的な声で頻繁に鳴くので、観察しやすい鳥の一つです。ハルニレなどの大木の幹をせわしなく移動しながら餌を探す姿をよく見かけます。



コゲラ (*Dendrocopos kizuki*) ♀

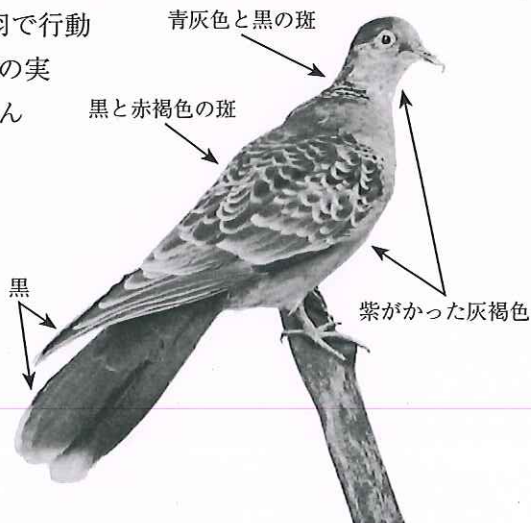
10. キジバト (雉鳩)

札幌のような都市部では、公園などでたくさんのハトを見かけます。街中でよく見かけるハトは野生のカワラバト (*Columba livia*) を伝書鳩などとして利用するために飼育されていた家禽で、ドバトとも呼ばれます。今では野生化して世界中で見られるようになりました。植物園ではドバト以外にもキジバト (*Streptopelia orientalis*) やアオバト (*Sphenurus sieboldii*) などのハトを見る事が出来ます。その中で最も頻繁に園内で確認できるのがキジバトです。

キジバトはハト目ハト科の鳥で、ヤマバトとも呼ばれます。大きさはドバトと同じぐらいで、嘴から尾までが33 cm程になります。胴体は紫がかった灰褐色で、背中と翼は黒地の羽に赤褐色の縁どりがあるため、斑模様に見えます。翼の先と尾は黒くて、頸の両側には特徴的な青灰色と黒の斑模様があります。ドバトには様々な体色の個体がありますが、キジバトのように背中が斑模様になる事はないので、容易に見分ける事が出来ます。

種小名の *orientalis* (ラテン語で「東方の」の意) が示す通り、キジバトはシベリアからインドまでユーラシア大陸東部に広く分布しています。国内では北海道から沖縄まで全国に分布していて、主に九州以北にいるキジバト (*S. o. orientalis*) と沖縄や奄美諸島にいるリュウキュウキジバト (*S. o. stimpsoni*) の2亜種に分けられています。キジバトは屋久島以北で繁殖し、本州や九州、四国では一年中見られる留鳥ですが、北海道には繁殖のために春から秋の間飛来する夏鳥です。主に平地から山地の林に生息していますが、近年では人に慣れて市街地にも現れます。大きな群れは作らず2、3羽で行動し、地上を歩いて植物質の餌を摂るほか、樹上で木の実を食べる事もあります。巣は低木上で枝を皿状に組んで作ります。

園内では春から秋の間、早朝に林の下で餌をついばむ姿がよく見られます。ドバト程は人に慣れていないため、人に気がつくと大きな羽音をたてて樹上に飛び去ってしまいます。姿が見えない日も多いですが、毎日のように樹木園や湿生園周辺の樹上で「ゼゼッポッポー」という鳴き声が聞こえてきます。夏を過ぎると3羽から4羽で行動している事が多いので、人知れず園内で繁殖しているのかもしれませんが。



キジバト (*Streptopelia orientalis*) 性不明

11. ゴジュウカラ (五十雀)

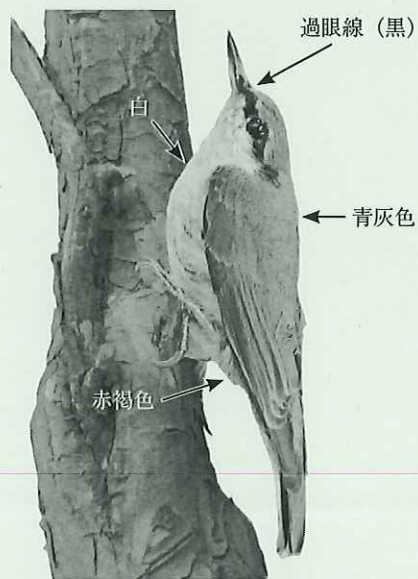
植物園の中で樹木園など木が多い場所を歩いていると、逆さまになりながら幹や太い枝をせわしなく移動している鳥を見る事があります。数回木を突いては移動を繰り返すのでキツツキのようにも見えますが、これはゴジュウカラ (*Sitta europaea*) という鳥です。

ゴジュウカラはスズメ目ゴジュウカラ科の鳥です。体はスズメくらいの大きさで、体のわりに尾が短く、ずんぐりとした体形に見えます。体の背中側は青灰色で、お腹が白く、脇から下尾筒は赤褐色や茶褐色をしています。頭部にはよく目立つ黒い過眼線があります。コゲラ (*Dendrocopos kizuki*) やキバシリ (*Certhia familiaris*) はゴジュウカラと似た行動をしますが、背中がそれぞれ黒褐色と茶褐色なので見分ける事が出来ます。また、幹に逆さまにとまる事が出来る鳥は日本ではゴジュウカラだけなので、動きからも他の鳥と見分ける事が出来ます。

ゴジュウカラはヨーロッパからカムチャッカ半島までユーラシア大陸に広く分布しています。日本では留鳥として全国に分布し、本州以南では標高 1,000 m 以上の山地の広葉樹林や針広混交林で多く見られますが、北海道では平地でもよく見られます。国内のゴジュウカラは地域ごとに3つの亜種に分けられています。北海道で見られるのはシロハラゴジュウカラ (*S. e. asiatica*) と呼ばれる亜種で、残りの2亜種、ゴジュウカラ (*S. e. amurensis*) とキュウシュウゴジュウカラ (*S. e. roseilia*) よりも脇の赤みが薄いため、お腹全体が白く見えます。

幹や太い枝をらせん状に移動し、木の窪みなどにいる虫や、木の実などを食べていることから、別名でキマワリ (木廻り) とも呼ばれます。木の裂け目に木の実を固定して突ついたり、樹洞に木の実を蓄えたりと、賢い一面もあります。繁殖には樹洞やアカゲラの古巣を利用しますが、入り口が大きいと土を運んで埋め、適当な大きさに整える事があります。

園内で一年中見られ、1965年にはじめて繁殖が確認されました。園路を歩いていると木の裏から突然現れ、しきりに幹を突いていることがあります。そのような時は動かずに静かに観察していると、逆さまになって移動する様子を間近に見られるかも知れません。



ゴジュウカラ (*Sitta europaea*) ♂

12. ツグミ (鶇)

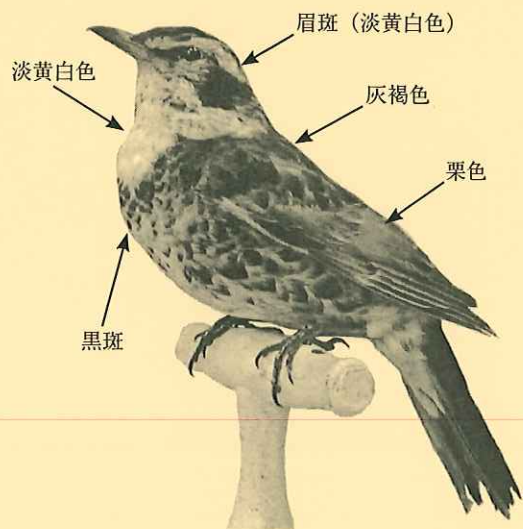
植物園では1年を通して様々な種類の鳥を見る事が出来ますが、繁殖のために春から夏にかけて園内に飛来し、秋になると越冬のために南へと移動する種類も多いため、冬には観察できる鳥の種類が少なくなります。一方、鳥の少ない秋から冬にしか見る事の出来ない鳥がいます。このような冬鳥は園内では少ないのですが、その代表格がツグミ (*Turdus naumanni*) です。

ツグミはスズメ目ヒタキ科に含まれています。大きさはハトより一回り小さくて頭から尾までが24 cm程になります。頭から背中は灰黒褐色で尾羽は黒褐色をしていて、翼は黒褐色でそれぞれの羽が栗色で縁取られています。胸から腹は白く、胸から脇にかけては黒斑があります。翼の栗色の幅と胸の黒斑の数は個体によって大きく異なりますが、どの個体でも眉斑と喉、頸の側部の淡黄白色がよく目立ちます。雄は雌に比べて翼の栗色が明瞭に、胸の黒斑が密になります。

ツグミには前述の特徴を持つツグミ (*T. n. enomus*) と、翼が一様に灰褐色で胸や尾羽が赤いハチジョウツグミ (*T. n. naumanni*) の2つの亜種が確認されています。どちらも国内に飛来しますが、両亜種の特徴が混ざった中間型の個体も多数確認されています。園内にはツグミの仲間のクロツグミ (*T. cardis*)、アカハラ (*T. chrysolaus*)、シロハラ (*T. pallidus*) なども飛来しますが、いずれもツグミのようにはっきりした眉斑が無いので見分ける事が出来ます。

ツグミは冬鳥として日本各地や朝鮮半島、中国などに渡来し、春になると繁殖のためにシベリアへ渡ります。渡来したての時期には山地の林などで木の実を食べていますが、次第に低地の畑や芝生などの開けた場所に分散します。

園内には主に春と秋の渡りの時期に群れで飛来し、芝生や林床で餌を探しています。餌を探す時には、周囲の確認のためか数歩はねてから胸を反らせ、また数歩はねるといった行動を繰り返します。積雪期には池の縁や木の根元など地面が出ている場所で単独で見かけることがあります。また、私たちが防寒着を着込むような真冬でも、よく池の浅い場所を利用して水浴びをしているため、冬の間も温室前の橋から観察することが出来ます。



ツグミ (*Turdus naumanni*) ♂